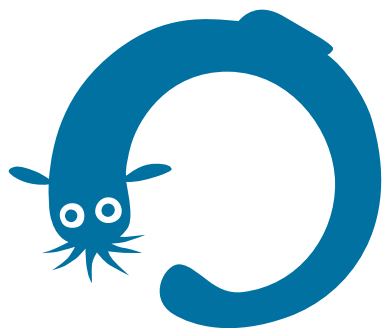


そうかわせみ、



そうかわせみ、
Vol.3



相沢正一郎
歌 2



岡島弘子
夢のうちそと 4



一色真理
地震の日 1 8



伊藤浩子
ひとり 12

あとがき 14

歌

かぜは わたしに似ているのがいい……ささやきはそよかぜにさ
 けびはこがらしに ことばは葉ずれに似ているのがいい。
 あかるい青竹の幹のあいだをすべる冷えた風はいい。タンポポの綿
 毛をはこぶ風はいい。自転車をおす風はいいやだ。すなぼこりをは
 こぶ風はいいやだ。せんたくものを筆りとる風も。
 レースのカーテンをゆらし 床をひやし テーブルのうえの書きか
 けの日記のページをめくる風はいい(ああ 足の爪を切ったり か
 ぼちやの煮物をたべたり 手紙を書いたりした……懐かしい わた
 しの日々)。

*

なたねづゆ さみだれ きりさめ さざんかしくれ……(わたしは
 名前をなくし あかるいささやきのほうへ 舟をこぐ)……あせも
 からし うのはなくたし きつねのよめいり ばばおどし……

*

(みずをすくう わたしのかおがこわれた)

夢のうちそと

ふりそそぐもの
うけとめきれないもの
まだまだふる
ことばのような放射能
放射能のようなことば
ことばであり それはそのまま放射能
ことばはおそろしく
ことばはとうとい
うけとめなければ あふれこぼれても
うけとめて詩にしなければならぬ
黒くても詩にしなければ
血のように赤くても詩にしなければならぬ

ふりそそぐひかりと
ひかりかがやく放射能
舞い散るはなびらと
はなびらをよそおう放射能
ひかりはいのち
ひかりは死
はなびらはうつくしく
はなびらはキケン
春をよろこび
春をうらむ

断水のあとの
蛇口の一滴はあまく そしてあまりに苦い
一滴の希望
一滴の絶望

夢のそとがわにふる

ヨウ素 プルトニウム

しずかにふつて つもつて

生涯消えることがなくても

夢のうちがわまではとどかない だから
夢をみる

さら地のあとの新芽のような

これまでとは別の日本列島の夢

放射能にも適応する

まったくあたらしい からだの夢をみる

夢はおそろしく

夢はやさしい

それでも夢をみる

いきぬくために

ことばはとおとく

ことばはおそろしい

ことばをあやつるひとは汚染されても

ことばは汚染されない

だから夢をみる

ことばでつながる夢を

いきぬくために

ぼくはそのとき、心臓のリチウム電池が切れかけていたので、なじみの時計屋に向かって狛江の街を歩いていました。

電池の残量が減ると、脈が二回に一回ずつ飛ぶようになります。それが時間切れの合図なのです。

でも、今日に限って、お店にはシャッターが下りていました。貼り紙はなく、なぜなのか理由は分かりませんでした。

脈がある間に、開いている店を見つけて、まだ切れていないはずの保証書を見せればいいと、それでもものんびり構えていました。

*

その日の朝も、ぼくは詩を書くのに失敗しました。書斎の窓を開けて、消しゴムで消しそこねた言葉を、生きたまま地面にばらばらと捨てました。

言葉はしばらくうごめいていましたが、だんだん動かなくなってきました。やがて降りてきたカラスやムクドリなどがついばんで、最後にひとつかみの文字だけが残り残りました。

意味があるともないとも見えるそのフレーズが、なぜか気になったのですが、忘れることにしました。ぼくのノートにはまだまだたくさんさんの言葉がありあまっていましたから。

ぼくの「撃て！」の命令を整理して静かに待っている、無数の黒い兵士たちみたいに。

*

太陽が水に落ちた！

その時でした。そう誰かが叫んだのは……

*

東の空に大きな耳たぶがひとつだけ浮かんでいます。

ひとり

その森の入り口の
深成岩を
ルーペでのぞき込む

足元のぬかるみと
ばらばらに落下していく空を

数えてはいけない
はかつて

裂けめは深くなる
遠方に

ひびきわたる笑い声に
こんなにもおびえてしまう

断絶しているのは宵闇

片方の目だけ傷つけて
あくる日の

光の prabhasvara

大事なルーペは壊されてしまった

それが
どんな夢の歪曲だったか

入り口に戻り今度は触つてあるいは嗅いで確かめてみるつもりだ

(森の入り口の
深成岩にはこの舌先で

東日本大震災が起きて、まだ部屋全体が大洋を航海する船のキャビンにいるように揺れやまな中、東北地方の沿岸に大津波が打ち寄せ、どんなSF映画にも及ばない映像が目の前に展開するのを、テレビで茫然と見つめていた。そして原発の建屋が吹き飛び、放射能雨が東京にも降り注いだ。私は詩に關しては寡作で、特にいわゆる機会詩のようなものは書かないし、書けないのだが、今回は震災の当日からパソコンに向かい、一週間ほど半ば自動的に言葉を吐き続けた。本誌に発表したのはその前半で、後半は新潟県から出ている「北方文学」という雑誌に「地震の日2」として寄稿させていた。その後、他のメ切もあつて、手が止まってしまったが、「地震の日3」も書くつもりでいる。なお、本誌と前後して私の新詩集『エス』と電子ブック『夢千一夜』が発売になる予定。

(一色)

野川朗誦会を今年も開くことになった。六月五日午後一時半から四時まで。場所は成城ホール集會室（小田急線・成城学園前駅徒歩五分）。「そうかわせみ」の会が主催する。出演者は「そうかわせみ」のメンバーおよび、広瀬大志さん。渡辺めぐみさん。北爪満喜さん。小笠原鳥類さん。長野まゆみさん。田野倉康一さん。共通テーマのひとつは、「そうかわせみ」にちなんで「そうかわせみ」と、ひらめいたひとつのことを、朗誦の始めに叫んでもらう。そして、もうひとつのテーマ、私の一番大切なもの、と題して、それに関連した詩や作品を読んでもらう。めったに聞けない長野さんの作品の、ご自身の朗誦もあり。長野まゆみさんが昨年刊行した『野川』について、その裏話やエピソードを田野倉さんと語り合う。そうした対話も用意している。ぜひいらしてください。問い合わせは岡島まで。

(岡島)

悪夢の日々あとかぎにかえて

三月二十五日(金)、私は主人の車の助手席に乗っている。主人はいない。後部座席には犬と猫。何故かブレーキがはずれ、車は数十m動いたが自然に止まった。車をおりて振り向くと、誰も乗っていないはずの車がまた動き出し、人を轢いているのが見えた。

四月四日(月)、白装束の暗黒集団が幼児虐待など、詩人たちの目の前で殺人を犯している。私は怒って棒を三本投げ付けるが、棒には勢いが無い。私を殺そうと追いかけてくる坊主頭を、階段上の天井にぶら下がり全身を揺らして寄せ付けないうかがんばるが、坊主頭は何度転んでも起き上がり、暗黒集団の歴史を語りながら襲ってくる。

夢の身体感覚は、地震の記憶とその錯覚にどこか似ている。被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

(伊藤)

『名づけられた葉なのだから』、『この星で生れた』をありがとうございます。お菓子をいっぺんに食べないように、毎日ひとつひとつ舌(音読)と耳で味わいました。

《唄を忘れた金糸雀》の現代詩は、やがて、後の山に捨てられてしまうのかもしれないね。(もしかして《唄を忘れた》散文詩を書いている僕が、こんなことを言っているヘンなのかもしれない僕が)。僕も、こっそり(?) こんな歌を書いてみました。

くさふんで わらいがお
かれはふんで うれいがお
こいしふんで なまづめはがし
びっこひきひき なきがお

(相沢)

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.3 2011年5月20日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
